九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[018]九州人類学会報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2244067

出版情報：九州人類学会報. 18, 1990-07-31. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

序　　文

九州人類学研究会会長　　丸　山　孝　一

エドワード・ホールは、proxemics の概念を使って人間の空間感覚を分析し、これによって文化の比較研究をしたことで知られている (Hidden Dimension, 1966)。彼はまた、ほとんど無意識の領域にまで及ぶわれわれの空間感覚とその行動様式を他の動物と比較することによって、人間の行動をいっそう明らかにしている。つまり、彼は、後で発展させた時間論とともに、空間に関する人間の行動を生物学的次元および文化的次元から解釈しようとしたと言えよう。

今日、国際化論争がしきりであるが、ホールの文脈を借りて解釈すれば、これも要するに人間の縄張りに関する議論に過ぎないと言えよう。一民族、即ち一国家という稀な例を除けば、たまたま異なる言語、宗教、儀礼体系など、つまり異なる文化体系を持つ人々が同一空間を共有し、これを一政治単位とするとき国家が成立する。しかし、国家の縄張りは、政治以外の局面でいろいろと様変わりを余儀なくされつつあるように見える。近年におけるヨーロッパ共同体の形成、軍事ブロックの再編成、多国籍企業による生産・流通・消費パターンの流動性などは、その具体的現象の一例に過ぎない。国際関係のみならず、個々の国内問題としても、多くの国々が深刻な民族問題を抱えていることは周知の通りである。

国際問題を取り扱うのが広義の政治学、あるいは一部の経済学の課題であるとすれば、文化人類学は、異文化間関係、または民族間関係論を最も今日的な課題の一つとしているとしていると言えよう。これは文化人類学が国民国家を研究対象としないと言うことではもちろんなく、民族問題を取り扱うのが文化人類学固有の守備範囲の一つであると言う意味である。先頃、日本民族学会では人類学、民族学における研究倫理について見解を発表したが、従来、多くの研究者が無言で通過してきた被調査者側との関係に関する現実問題を避けて通れないところまで今日来ていると思われる。

本会では、過去1年間に例年通り10回の研究会を実施し、本号にはその内6編を収録することが出来た。執筆者の方々のご努力に敬意を表するとともに、会員の皆様方のご協力に感謝したい。地味ではあるが、地方の研究集団として堅実な歩みを続けたいものと念じ、会員の皆様の一層のご発展をお祈りする次第である。